

難民など、外国にルーツをもつ学生のための  
2025年度生活支援プログラム 支援生募集中

日本に定住する難民など、大学や専門学校で学ぶことが経済的に困難な方に、返済不要の「生活支援金」を支給します。また、卒業後の自立に向けて、進路・就職等に関する研修会や個人面談を行います。

**募集人数** 日本の大学、専門学校に在籍中 / 来年4月に入学予定の方 20名

**支給金額** 年額24万円

**応募期間** 2025年1月6日(月)～ 2025年1月31日(金) 必着

▶詳細はホームページをご覧ください。 <https://support21.or.jp>



2024年8月の夏期研修会で進路選択について話してくれた卒業生の浦野 恵陸さん（ルーツ：ブラジル）



夏期研修会に集まった多様なルーツの学生と協力者の方々

マンスリー  
サポーター  
募集中!

500円から登録できる、  
マンスリーサポーターを募集しています。

先日は、過去にインドシナ難民として来日後、当法人の支援により進学した方から、「今度は後輩たちを応援したいです」という温かいメッセージをお寄せいただくともに、マンスリーサポーターのお申込みをいただきました。

皆さまからのご支援は、難民をはじめとする外国にルーツを持つ子どもたちの学習支援教室の運営や、専門学校生、大学生などの学校生活を支えるために、大切に活用させていただきます。

お支払いは口座引き落としの他、クレジットカードもご利用いただけます。

2025年も、多くの子ども・青年が学びを継続できるよう、ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



Newsletter

Support21 Social Welfare Foundation

Vol.76 2025.1

社会福祉法人 さぽうと21

理事長 高橋 敬子

社会福祉法人さぽうと21は…

認定NPO法人難民を助ける会 (AAR Japan) を母体に、その国内事業を受け継ぎ、社会福祉法人として1992年に設立されました。

日本で生活する難民やその家族、定住外国人などの相談に乗り、学業継続のための就学支援や学習支援など、自立を後押しする活動を行っております。

私たちの活動を応援して下さる方を  
求めています!

■会 員：法人会費50,000円/個人会費5,000円

■ご寄付：随時受付

■マンスリーサポーター：随時受付



詳しくはこちら▶

会費・ご寄付とも税法上の優遇措置が受けられます

◆会費・寄付のご送金口座◆

ゆうちょ銀行	振替口座：00180-7-25470 加入者名：社会福祉法人 さぽうと21 ※通信欄に会費または寄付とご明記ください
三井住友銀行	目黒支店(普) 851872 名義：社会福祉法人 さぽうとにじゅういち
みずほ銀行	目黒支店(普) 1180279 名義：社会福祉法人 さぽうとにじゅういち
三菱UFJ銀行	目黒駅前支店(普) 1390060 名義：社会福祉法人 さぽうとにじゅういち ※銀行振込み後は事務局までご一報ください

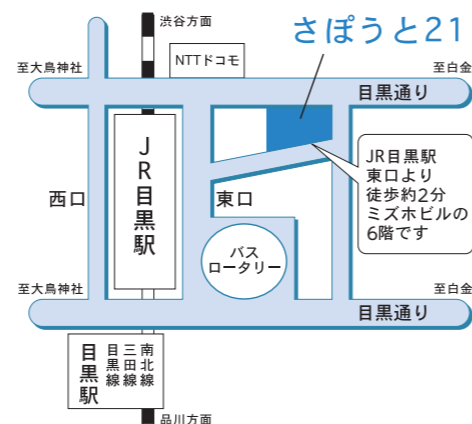
お問い合わせ

社会福祉法人 さぽうと21

住所：  
〒141-0021  
東京都品川区上大崎2-12-2ミズホビル6階

TEL：03-5449-1331 FAX：03-5449-1332

E-mail：info@support21.or.jp URL：https://www.support21.or.jp



社会福祉法人 さぽうと21 Support21 Social Welfare Foundation

Newsletter

Vol. 76

2025.1

難民教育相談センター（通称「えすくーる」）開設から半年

— つなげる・つながる・共に歩む「伴走型相談センター」を目指して —

2024年6月20日、世界難民の日、当法人は東京都品川区に難民教育相談センター／Educational Support Center for Refugees（通称「えすくーる」）を開設しました。これまでも難民の方々からの様々な相談に対応してきましたが、「就学支援」・「学習支援」を続ける当法人には、やはり教育に関する悩みごとが数多く寄せられていました。「日本語を勉強したい」「大学に行きたい」「進学資金が足りない」など、どれも相談者一人ひとりの将来を左右する切実な問題です。また、2021年まで累計915人に留まっていた難民認定者は、2022年は202人、2023年は303人が認定され、急激に増加しています。難民の方々の散在化が進んでいることも、日頃の業務の中で実感しています。今後さらに、日本各地に定住することとなった難民の方々からの相談が増えていくと思われ、教育関連の相談対応を強化する方法を模索してきました。そこで、長年、学習支援活動に資金面でご支援くださっている一般財団法人ファーストリテイリング財団の柳井 正理事長（株式会社ファーストリテイリング代表取締役会長兼社長）から、2023年末に個人としてのご寄付を頂いたことを契機として、難民の背景をもつ子ども、若者、大人たちの教育に特化した相談センターの設置に踏み切った次第です。

開設から約半年が経過し、その必要性、有用性を実感しつつ、さらなる展開を検討しております。以下の通り、日頃から協力関係にある機関・団体の方々、活動にお力添えくださっているの方々をお招きして、活動の様子をご紹介したいと考えております。当日は難民の背景をもって日本に暮らす方々の「教育に寄せる想い」をお届けする予定です。

日時 ▶ 2025年2月22日(土) 10時～12時

場所 ▶ さぽうと21事務所

※上記イベントにご興味をおもちの方はご連絡ください。詳細が決定次第ご案内いたします。



日本語学習に関して相談する難民の方々



より良い相談対応を目指して、各自の知識や経験を共有しています

## 「えすくーる」相談員紹介



### 伊藤 悦子 (火・水曜日担当、ベトナム語・英語対応)

ベトナムで母子保健事業、米国で移民女性のDV・性暴力・人身取引被害者支援に携わる。米国の就労ビザ取得に何年も費やすなどマイノリティとしての自身の辛い経験を経て、日本に住む外国人の生活支援に興味をもち、さぼうと21でボランティアを始める。前職は米国・ワシントン州地域相談員。通訳、翻訳者。



### 大戸 航 (月曜日担当、学習支援室コーディネーター兼務、日本語教師)

市職員 (児童・福祉担当部局) として奉職中にさぼうと21の研修を受講したことをきっかけに、難民支援に関わりをもつようになる。現在は日本語学校で留学生の日本語教育に携わりながら、さぼうと21の錦糸町教室のコーディネーターを務める。



### 田中 美穂子 (金・土曜日担当、中国語対応、日本語教師)

国内外の大学や教育機関にて、子どもから大人まで多様な人々の日本語教育と日本語支援者養成に携わる。さぼうと21との出会いは2011年。学習支援室で難民の方々との関わるうちに、全人的な視点の必要性を感じ、福祉や就労分野の相談援助について学ぶ。社会福祉士、キャリアコンサルタント。

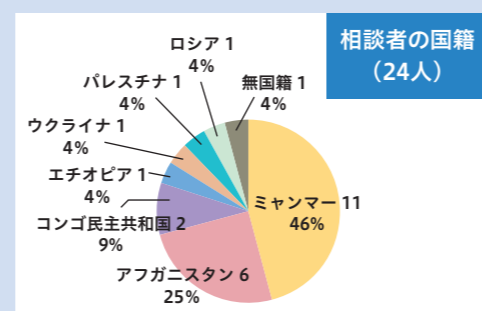
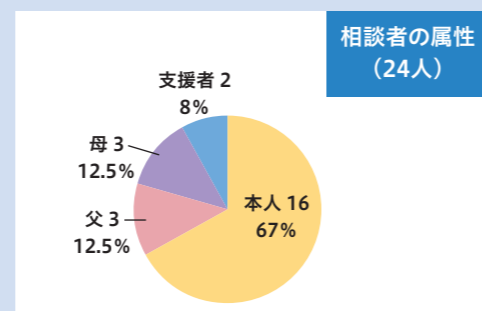
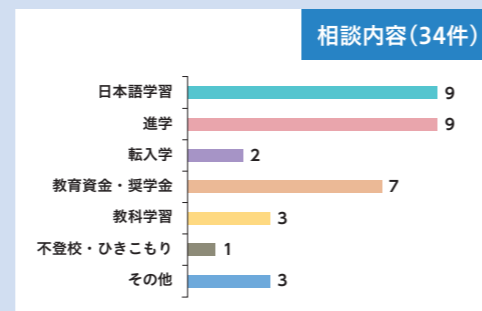
## 開設後の相談対応状況

6月20日～10月20日の4か月間で、24名から、のべ34件の相談があった。

最も多かったのは進学と日本語学習に関して(各9件)であった。「進学」の内訳は大学5件、高校3件、その他1件で、「UNHCRの難民高等教育プログラムでの大学進学について知りたい」「定時制から全日制の高校に転入したい」「中学卒業後来日したが、日本の高校に入るにはどのようにすればいいか」等の相談が寄せられ、制度の説明や高校受験に向けたフリースクールの紹介、関係機関との調整等を行った。日本語学習については「仕事を得るために日本語を勉強したい」「大学に行くために日本語を習得したい」「休日の夜にオンラインで学べる場所を知りたい」等の問合せがあり、日本語教室の情報提供や、候補となる教室への仲介等を行った。また、高等学校等就学支援金の申請手続きのサポートや難民に特化した奨学金の情報提供にも7件対応した。

本人からの相談が最も多いが、教育相談という特性上、保護者からの相談も多く、4分の1を占めている。日本語教師等の支援者から、教育制度や支援の在り方に関する相談もあった。相談者の国籍は、情勢不安の続くミャンマー、アフガニスタン、アフリカ諸国等。ウクライナ、パレスチナの方々からの相談もこれから増えていくとみられる。

「えすくーる」では、個々の相談に対して、インテイク(相談内容の聞き取り)、相談事や関連情報の収集・整理、情報提供、同行、関係者との調整、手続き支援等を行い、相談者が次の段階に進めるよう対応している。



## 「難民も社会の一員として役割を果たしたい」

アサイー・アボルファズルさん(65)は政治的理由でイランから日本に逃れ難民として受け入れられました。3人のお子さんは当法人の学習支援・就学支援(生活支援金)を受けて学校に通い、今はそれぞれの道を進んでいます。アサイーさんは長年努力を重ねて安定した暮らしを築き、日本に住む同胞を支えたいとNGOを発足させました。その歩みとともに、難民に対する支援について伺いました。

(インタビュアー：難民を助ける会 太田 阿利佐)



### ―来日までの経緯を教えてください。

初めて日本に来たのは外交官としてです。革命前のイランは中東で最も発展した国で、日本企業の工場がいくつもあり、日本製の家電や車も身近なものでした。しかし1979年、ソビエト連邦(当時)の支援を受けた共産主義者と保守的なイスラム主義者が革命を起こし、イスラム教政権を樹立しました。新体制は進歩的な学生や知識人を処刑し、大学を閉鎖。外国企業は去り、多くの人が海外へ出稼ぎに行きました。私は数年後に再開されたテヘラン大学で学び、外交官になったのです。

### ―来日したのは改革推進派のモハメド・ハタミ大統領の時代ですね。

日本への赴任は私の夢でした。日本企業に投資の再開を促したかったのです。2001年には日本政府の後押しで経済使節団が結成され、日本経済団体連合会の企業を中心に100人以上が参加。派遣は大成功でした。多くの企業がイランとのビジネス開始に合意しましたが、その実現には、イランが核兵器製造をやめ、経済制裁が解除されることが必要でした。私は政府に、日本と友好関係を築き、国民を失業と飢餓から救うよう訴えました。

しかし政権は、石油や天然ガスの輸出代金で兵器を購入し続けました。失業し、街頭で抗議した多くの若者が逮捕され、殺されました。それに抗議して政策変更を訴え続けた私は、テヘランに呼び戻されて尋問されました。私は逮捕を恐れ、家族と日本へ逃れて亡命を願い出ました。

### ―なぜ日本を選んだのですか？

政治家や外務省に知り合いが多かったので、欧米各国よりも待遇が良いと期待していたのですが、難民認定されるまで半年以上かかりました。この間の滞在費は大きな負担でした。外交官時代に知り合った同胞も、危険が及ぶのを恐れて協力してくれませんでした。仕事もなく、イランの親族からの送金に頼るしかない―これが難民としての現実でした。

子どもたち(当時17歳、14歳、6歳)の教育も心配でした。いつから学校に行けるか、日本語の勉強はどうしたらいいのか。私は自ら調べ、さぼうと21を見つけました。子どもの教育を支え、日本語や日本文化を学ばせてくれたのはさぼうと21です。

### ―今、政治的な情勢不安を理由にアフガニスタンやミャンマーなどから日本に逃れてきた人々が急増しています。アサイーさんの場合、難民認定後には、どんな問題が？

私たちは夫婦で洗濯工場の仕事を見つけ、家も借りました。仕事は重労働で、腰が痛みました。その後私は英語教師になりましたが、妻は体に負担のかかる仕事を続けなければなりません。日本での最大の問題は、政府の支援が乏しいことだと思います。難民受け入れに厳格な基準を設けるのは理解できます。ただ、私が亡命した頃、欧州などでは、難民は政府から数年間の教育支援と永住権を与えられていました。それは、社会の一員として平等な権利を享受できるということです。日本では違います。

私は生活費の援助は求めません。豊かで安定していた暮らしは大きく変わりましたが、それは新しい経験との出会いでもあります。フランスに亡命し生活費を支給されている友人は、無職で社会とのつながりもないと言います。自力で生活し、税金を払って社会に貢献する方がずっと自分に誇りを持てます。難民も社会の一員として認めてほしいと思います。

### ―日本の難民支援団体に伝えたいことは？

日本では難民支援の制度化が不十分で、支援を受けられない難民が孤立しています。ですからさぼうと21のような存在は本当に大事です。さぼうと21の学習支援と学費の支援がなかったら、私の子どもたちは学業に苦しみ進学もできなかったかもしれません。

### ―NGOを設立されたそうですね。将来の夢は？

在日イラン人の中には、日本文化になじめずストレスに悩む人が多くいます。そこで、日本文化に親しんでもらい、日本人との交流を促そうと考え、文化団体を設立したのです。現状では、活動を継続していくにはさまざまな課題があります。互いの文化的な交流を深める中で、将来再び外交官として両国の関係を発展させ、日本企業を誘致し、今苦しんでいる故郷の人々が他国と同様に経済的繁栄を享受できるようにしたい。それが私の夢です。